

辰野
隆

内田百閒

内
田
百
閒

中勘助と内田百閒

中勘助氏の作品は、昔から折にふれて愛誦している。殊に近年、雑誌「心」に氏の寄せる随筆はほとんど漏れなく読んで、いつも、こまやかで静かな情念と感性の交錯に、なみなみならぬ興趣を覚えるのであるが、目のあたり中氏の風豊言話に接したことはいまだかつてないのである。ただ能成翁や豊隆翁と盃をふくみながら款晤す

る夕に、あるいは小堀杏奴夫人の随筆に、ときどき彷彿する中氏の姿や言動を、間接に想見するにすぎない。それにも拘らず、未見の寂しき人はすでに久しく僕の心の裡に住んでいたのである。

中氏のものをはじめて読んだのは、漱石逝いて間もない頃、ある雑誌に——たしか三田文学であったと記憶しているが——氏が寄稿した漱石をめぐる追懐の一文であった。昔、東大文科の学生として中氏が聴講した漱石の講義ぶり、確乎たる根底に立ちながら、溢るるユーモアを交えつつ、英文学の理念を伝えんとする漱石の学殖を

十分認めてはいても、中氏の、気の抜けたような、そつぽを向いて窓外の景を眺めているような聴講態度が漱石の注意をひいたらしく、やがて、漱石が、「僕の講義なんか聴いていないような様子をしながら、聴いている学生もいるらしい」というような言葉を講義中に狭んだのを中氏が興味を持って書いていた。また、中氏は、漱石の初期の浪漫派的な文章、『薤露行』の冒頭の一句を引いて、「とても追^っいて行けない」と軽い軽侮の念を抱いていたらしい口吻をもらしているのを読んで、僕はおもしろいと思った。そればかりでなく、氏が大学卒業後の

ある期間、辺鄙^{へんぴ}な地方で貧寒な月日を送ったいきさつを漱石が同情して心配しているのに、氏はたとえ淋しくとも貧しくとも、健康を害おうとも、たのしみ自らその裡にある、と答えている所などは、読んでまことに涼しい感があったのである。

漱石周辺の秀才逸足のなかでも、寺田寅彦と中氏とは、異彩を放っていた。一つは文芸の教養の深い物理学の権威として、一つはオーベルマンのような孤高な文人として。この類の少ない文人の今までの業績が一括して、僕等読者の眼前に供えられるのは、なんとと言っても嬉しい

ことである。

百閒入道を初めて見たのはいつの頃だったろう。おぼろ気な記憶をたどると、四十年前、僕が当時四年制の東大法科の課程を五年がかりでかろうじて卒業してから、改めて文科の仏文学科に入学した頃、僕等の研究室に豊島与志雄君を訪ねて来た学生があった。からだに厚みのある、頭の大きな、眼の玉の円い学生だった。その青年は豊島君と何か一言二言交わしてから室を出ていったが、僕はその学生からなんとなく大入道とでも言いたい

印象を得た。それが内田栄造という人だと知ったのであった。その内田入道が百閒あるいは百鬼園と号し、漱石の崇拜者で俳句を善くし、随筆の名手であることを知ったのは、それから十年も後であった。しこうして入道と相会して互に酔って冗話を交わすようになったのはさらに十年の後であった。

太平洋戦争の一、二年前、僕の旧友小倉がNYK（日本郵船会社）の重役となった頃、ある日久しぶりに来訪して、NYKの文書顧問として、立派な文人を推挽してくれ、優遇するぞ、という頼みだった。僕は即座に百鬼

園入道を推した。小倉は悦んだが、いざ採用となると、人事課で一応入道の身元を調べなければならなくなつた。調べた結果は、堂々たる文章家だが、奇人で皮肉で、酒屋と高利貸の間を往復する常習があることが判明したので、NYKの方で怯えてしまつて、御遠慮申上げた方が無難だろう、ということになった。しかもその口実は「当社に取っては内田先生はあまりに良すぎる」。そこで僕は居なおつた。僕は小倉重役の懇請に誠意をもつて内田大人を推したので、酔狂からNYKをからかつたのではありません。悪すぎるといふ御認定なら已むを得ま

せんが、良すぎるから断わるといふ御挨拶は承服いたしかねます。何卒御再考を願います、と主張したのである。そこでNYKも再考の上、船会社には良すぎる百閒先生を礼を尽して招くことになった。内田大人はそれから太平洋戦争の初期まで、重役のような大きな室を与えられて、超重役のような顔をして、風払万年枝という拓本の大幅を壁間にかけておさまっていた。僕は百閒大人のおかげで、二夏つづけて、NYK最上級の船に乗って、横浜神戸間を数回往復して、夏の海の楽しさを満喫した。百閒入道の著作を僕は折にふれて読んで来たが、僕の

最も感服して、今もときどき思い出して愛誦するのは『菊の雨』と題する一文である。今はこの述作は随筆集『菊の雨』の巻頭を飾っているが、それはかつて入道が陸軍教授たりし頃、ある年の秋、新宿御苑の観菊の宴に招かれて、黄菊白菊大輪小輪の見事な花の列をしみじみ眺めて帰宅すると、折から大雨となり、降りそそぐ雨の中に、今見たばかりの菊の列が、列の終るところから逆に列の始まる方へ雨の間を縫って回りだす、不思議な幻想を、実にたくみに描き出した傑作なのである。いつか、入道の面前で、僕が『菊の雨』を激賞したら、人道にやにや

わらいながら、「あんなもの、作文ですよ」と軽くあしらわれたが、入道が軽く扱った作文を、僕は今でも重く扱っているのである。百閒文学万歳！

畸人の印象——内田百閒

天明八年に上木された伴蒿蹊の『近世畸人伝』は風変りな書物である。それは、風変りな人物の伝でもあれば、風変りな人物伝でもある。蒿蹊の所謂畸人は必しも世俗

の畸人を意味せず、自ら「……畸人を以て目すと雖も、そのはじめ隠士を集むるの志に出づれば……」と題言に断わっているのだから、彼の伝えようとする畸人は初めから額縁には嵌らないのである。加之、同じ題言を読んでゆくと、

「吾党の人、此草案を見て曰く、莊子に所謂畸人も、自ら畸人の一家也、此記は始に藤樹益軒二先生を挙げ、次々にも徳行の人多し。こは畸人を以て目すべからず。人の為すべき常の道ならずや如何と。予曰く、然り、

然れども……唯広く心得られよ。此中例へば、売茶翁、大雅堂の類は子が所謂一家の畸也。仁義を任とせる諸老、忠孝の数子の如きは、世の人に較べて行ふ所を奇とせる也。是を例へば、長夜の飲をなして、時日甲子を忘れたるともがら儕ともがらの間に、独覚えたる人あらんには奇といふべし。……縦令題たとひに負そむくそしりの誚そしりを負ふも、亦辞せざる所なり。又詰りて曰く、然はあれど、此中、産を破りて風狂し、家を遺わすれて放蕩せるものあり、徳行の奇にたぐひ難しといはまし。曰く、風狂放蕩斯くの如しと雖も、其中趣味あり、取るべき所あるを挙ぐるな

り。玉石混淆に似たれど、彼も一奇也、此も一奇也。強ひて墨繩を引て咎むべからず。ただ風流に漂ひ、不拘に蕩けて、不孝不慈なると、功利に基し、世智にわしりて、不忠不信なるは、奇話の一笑に附すべきあるも、茲に収めざるのみ」

と釈明している。

畸人の定義は先ずいい加減にして、俗人の大福帳に対して「大貧帳」を書き、借金取りも鶯の——さては頬白の——声と悟っている内田百閒氏を僕は珍重すべき畸人

だと思っっている。百閒又百鬼園は備前岡山の産、文を以て当世に著聞し、又琴を善くす、東都に流寓して卓犖たくらく不羈き、交わるところ、概ね高利貪婪の悪鬼羅刹、魑魅魍魎……僕は何もそんな伝を撰ぶつもりは毛頭ない。唯我々の好奇心を刺戟した氏の時々の言動を印象的に誌して、燈前茶後のパス・タンに資するのみ。

数年前の夏、当時、NYKの文章博士たりし百鬼園入道に誘われて、僕と山妻は横浜から神戸までは新田丸に、神戸から横浜までは龍田丸に便乗して——この二隻の美

しい船は今は何処の海底に眠っているのか——贅沢な納涼航海をしたことがあった。往きの船であつたか、帰りの船であつたか、忘れたが、夕食後、我々がデッキの籐椅子にもた靠れて海風に吹かれていると、何を思い出したのか、入道は山妻を顧みて、「お宅の御主人は時々傘を忘れておいでになりますかね」と訊ねた。不意の質問に山妻は少々面喰つた気味だったが、「時々どころか、いつでも置き忘れてまいりますよ」と答えると、入道は泰然として、「そうでしょう。お宅の御主人に限らず、我々も傘は忘れますね。私などもいつも忘れて、家内から叱

られていますよ。全体、傘というものは買う時に、一本買うのがそもそもいけないので、傘の一本買いは米の一升買いのようで、みっともないですよ。歴としたブルジョアは、傘は必ずダースで買うものなんです。今後はそうなすったら如何です」

山妻は呆氣にとられて、海を眺めていたが、やがて、「ほんに、左様でございますね」とか何とか云ってばつを合わせていた。

入道が、同じくNYKの比叻丸の食堂で、三本のビー

ルを傾けながら、スープを飲み、魚を喰い、此の間にアイスクリームとシャーベットがはいる、肉を喫い、野菜を啖い、果物を吃い、菓子を咋い、而して最後のしるしに珈琲を呑んで、然る後に、改めてライスカレーを噉つた話は嘗て一度書いたことがあるから、此処には精しく述べるには及ぶまい。

兎に角洋食の食べ方としては実に破天荒だったので、僕は拙文に付け加えて、もし百鬼園にして意識して珈琲の後にライスカレーを注文したのなら真に驚歎に価する演出家である。又若し、自然に、巧まらずに、時の腹具合

に従つて、ライスカレーを餐したのなら、正に豪傑である、と記したのであつた。ところが、拙文がはしなくも、楚人冠翁の目にとまったらしい。或る日、我孫子の翁から一葉のはがきが僕の机上に舞いこんだ。曰く、内田百閒は豪傑也。

僕は日頃、百閒先生の随筆を珍重愛誦しているのだが、常に我が百鬼園入道には稀代の豪傑にして而も稀有な演出家なりと思わぬためしはない。世の百鬼園文章愛読者諸彦は首肯せらるるや否や。

ちなみに言う。蒿蹊は上述の題言の中で、「……貴人は奇の云ふべきあるも憚つて洩らす。また仕官の人の尠きは、奇は大様窮厄の間に聞えて、得意の人に稀なれば也。」とも云っている。曳尾の達人百鬼園以て如何となす。

(昭和二十一年秋)

日本文学電子図書館

内田百閒

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館